

明治三十年八月

	俸給	聴費	修繕費	旅費	雑給雑費	學生費	合計	臨時費	増設費	通計
美術院	二四、六〇〇	四六、五〇〇	一五〇	三〇〇	一、五〇〇	九、三六〇	四〇、五六〇	九八、〇〇〇		
東京高等美術学校	三八、三二六	一〇、七四三	二七七	四五〇	五、二七四	一、八〇〇	五七、八七〇	一四、四〇〇		
京都高等美術学校	二二、五六〇	七、七四〇	二〇〇	三〇〇	三、〇〇〇	一、二〇〇	三五、〇〇〇	六二、〇〇〇		
							一三五、四三〇	二七四、四〇〇		

③ 制服改正

この件については年報その他学校当局作成文書中に記載がないが、大村西崖主宰の『美術評論』第一号(三十年十一月)に次のように記されている。

○東京美術学校にては、制服の常時に不便なるを以て、着用を厲行し難きが爲に、そをたゞ禮服となし、このごろ別に一種の略章を制して、常にはこれを職員及生徒に着けしむといふ。その形はところ／＼蟻結びにしたる紐にて、昔の冠に付けたる日陰のかつらより案出したるものなるよし。職員のは紫にて二條、生徒のは青にて一條。右の肩より前後に垂れて、下端はこれを結び若くはこれを帯に挿む。

西洋画科設置以後、校内の空気は従来の制服、制帽とそぐわないものとなったために、このような改正措置がとられたのではないかと思われる。その後、岡倉校長の辞職を待っていたかのように、三十一年七月十五日には制服、制帽の全面的改正が行われる。

④ 日本絵画協会第二回、第三回共進会

明治三十年三月十五日から翌月三十日まで上野公園竹の台の旧博覧会第五号館で日本絵画協会第二回共進会が開催された。既述(336頁)のように、今回は日本画革新派のみの出品となり、同会の本来の趣旨が明確に示された展覧会となった。そして、四月六日に褒賞授与式が行われ、下村観山「光明皇后」(銀牌第一席、菱田春草「拈華微笑」(同第二席)、竹内棲鳳「廢園春色」(同第三席)が高位入賞し、西郷孤月「四季花鳥」のうち「春」、横山大観「無我」、本多天城「蘇武」、寺崎広業「昭君怨」、川合玉堂「孟母断機」、山田敬中「美音」、尾形月耕「武將詠花」、小堀鞆音「武士」、今尾景年「猫」、野村文孝「嵐山風雨」が銅牌を授与された。

次いで同年十月二十五日より十二月七日まで同所で第三回共進会が開催され、十一月二十六日に褒賞授与式が行われて、下村観山「嗣信最期」(特別銀牌)、小堀鞆音「常世」(銀牌)、寺崎広業「菊」(同)が高位入賞し、川合玉堂「家鴨」、山田敬中「平和」、大出東阜「菊花争雀」、本多天城「羅浮」、竹内棲鳳「枯野」、横山大観「聴

法」、菱田春草「水鏡」、西郷孤月「春暖」、小林吳崎「秋霽」、小坂象堂「小春」、尾形月耕「菅公詠詩」、村田丹陵「師長彈琵琶」、島田墨仙「致城帰途」、近藤中軒「美人」が銅牌を受賞。森川曾文「売薪説書」、大森敬堂「妙音」、梶田半古「阿古詠詩」、野村文孝「籠城峠の富士」、山元春拳「空山染月」、結城素明「春農・秋夕」、岡田秋嶺「写景四図」、溝口宗文「文苑双雛」、福井江亭「霜の朝」その他一五〇余名が褒状を授与された。

⑤ 彫刻教育改革運動および青年彫塑会結成

草創期の彫刻科では伝統色の濃い木彫中心主義の教育が行われたが、明治二十年代も終りに近づくにつれて西欧的な考え方と技法を導入して教育を改革しようという動きが活発になって来る。そこで中心的役割を果たしたのは大村西崖と白井雨山である。彼らはともに彫刻科第一回卒業生で、一時地方へ赴任した後母校へ呼び戻され、彫刻科の指導にあたる傍ら、相提携して教育改革を推し進めようとしたのであるが、その主義主張の淵源は森鷗外にあった。

森鷗外は後述のごとく岡倉校長に依頼されて明治二十四年から同二十八年まで「美術解剖」授業を、同二十九年から同三十二年まで「美学及び美術史」授業を担当したが、その間言論界において西欧美学思想、なかならずハルトマン美学の紹介に努め、明治美術会寄りの立場を表明していたので、本校教官の中では極めて特異な位置にあったと言える。西崖と雨山は鷗外の「美術解剖」嘱託教師時代の教え子であるが、特に西崖は在学中から千朶山房を訪れて鷗外の審美論を聴き、強い影響を受け、彫刻理論の確立を志すに至った。

た。

鷗外は彫刻については本校彫刻科の方針と真向から対立する見解を示していた。このことは「與某等論型品書」「告彫造家檄」（明治二十七年二月刊『柵草紙』）によく現われている。この二篇は明治天皇御大婚二十五年御祝典に際して陸軍将校ら三千五百余名が記念品を献納することになり、軍医学校長である鷗外が意見を求められて執筆したもので、前者は西欧彫刻制作法の概要説明であり、後者は西欧の「コンクール」に倣った作品募集規定を内容としている。その後、可美^{うまし}真手^{まて}命像^{みこと}献上と決まり、鷗外の指示どおりに募集が行われ、鷗外および黒田清輝、松岡寿、久米桂一郎、長沼守敬、辰野金吾、片山東熊が審査にあたり、工部美術学校出身の彫刻家佐野昭の作品が当選し、浜離宮内苑に銅像が建立されるが、鷗外の意見といい、企画の進め方といい、洋風美術家陣営すなわち明治美術会路線のものであった。なお、注目しておきたいことは、右の二篇が本校校友会機関誌『錦菴雑綴』創刊号（明治二十七年四月）に転載されていることである。これは本校の内部にも彫刻革新を求める動きが生じていたことの証しであろう。もっとも、この二十七年には岡倉校長も「美術教育施設ニ付意見」において西洋画科とともに西洋彫刻科も開設する計画案を公表している。しかし、西洋画科のように則刻西洋彫刻科を開設する意志は無かったようで、その在任中には遂に開設は実現していない。

大村西崖は卒業後京都市美術学校教諭となり、「美術解剖」、「数学」、「幾何学」、「彫刻」等の授業を担当した。明治二十七年三月に